

藤原宮朝堂院朝庭における幢幡遺構の配置と設計思想

Concerning the Plan and the Design Concept of the flagpoles on the Halls of State
in FUJIWARA Palace Site

内田 和伸

Kazunobu UCHIDA

Abstract: The south gate of the Imperial Audience Hall compound was at the center of the Fujiwara palace and capital (694–710). In front of the gate, seven pits were excavated in 2016. These were remains left by flagpoles erected for the New Year's Day ceremony in 701. Upon consideration, we found that the layout was designed based on right triangles extending from the center of the gate. The Zhoubi Suanjing describes the 3:4:5 ratio of right triangles as part of preparations for astronomical observation. The lengths of these triangles were based on multiples of 40 shaku (1 shaku = 0.295 m), because 40 was considered a lucky number, and the use of regular multiples (40, 80, 120) likely expressed a sense of public order on the ground, just as the planetary motions keep regular hours. This use of right triangles has two symbolic implications. First, it indicates the use of scientific knowledge such as astrology, and second, it is an example of the regular surveying techniques used for the construction of the ancient capital. It is known that tombs of emperors, and shrines associated with the imperial founder and deities, were built along the east–west and north–south center lines running through the gate.

Keywords: Fujiwara Palace site, Halls of state, South gate of Imperial audience Hall, Flagpole, Layout, Design concept

キーワード：藤原宮跡，朝堂院，大極殿院南門，幢幡遺構，配置，設計思想

1. はじめに

藤原京（694–710）は平城京に遷都するまでの古代日本の都で、東西、南北ともに約5.3kmで条坊制街路が敷かれていた。その中心に東西、南北約1kmの藤原宮が位置する。藤原宮の中心に位置するのが大極殿院南門で、その北に続く大極殿院は天皇が即位や元日の朝賀の儀式などに出御する大極殿を中心とする区画である。大極殿院南門を共有し、その南に位置するのが朝堂院という区画で、東西235m、南北320m、古代宮殿の朝堂院の中で最も大きい規模を有する。大極殿院南門も天皇が出御する重要な施設であり、朝堂院では重要な儀式や政務が行われた。朝堂院は大極殿院南門前の広場を取り囲むように左右対称に12棟の朝堂が配置されており、その広場を朝堂院朝庭と呼んでいる。

『続日本紀』大宝元年（701）正月乙亥朔条には「天皇、大極殿に御しまして朝を受けたまふ。その儀、正門に鳥形の幢を樹つ。左は日像・青竜・朱雀の幡、右は月像・玄武・白虎の幡なり。蕃夷の使者、左右に陳列す。文物の儀、是に備れり。」とある。このとき大極殿院の南門近くに鳥形幢、その左（東）に日像幢・青龍幡・朱雀幡、右（西）に月像幢・玄武幡・白虎幡を立て、外国の使節が左右に整列をした。そして、大宝律令も完成し、法律や儀式の諸制度、官僚機構や行政組織、学問や芸術が整ったと誇らしげに語る、古代史上の歴史的一場面であった。斯様な宮殿の朝庭とその施設配置に込められた含意も庭園史学の対象であろう。

この大極殿院南門前で奈良文化財研究所が2016年までに発掘調査を行い、この儀式の7本の幢幡遺構をすべて検出し、配置も特定した。2017年の『奈良文化財研究所紀要』(以下、紀要と呼ぶ)¹⁾に発掘調査の経緯、遺構の構造や配置の状況、配置計画、歴史的意義などが報告された。発掘調査の正報告は学術報告として区画毎にまとめているため、この紀要は公式見解ではあるが発掘調査直後の概報である。概ね納得のいく精緻な報告がなされているが、配置計画の解釈の部分では藤原京・宮の中心である大極殿院南門中心からの距離の検討により別の解釈も成り立ち、その

背景を考えると藤原宮の東西・南北の中軸線の延長部に位置する同時代の陵墓や神社についても脈絡のある解釈が可能となった。

以下、2章で遺構の概要と解釈、その問題点、3章で大極殿院南門中心から幢幡遺構までの距離の計測方法と結果、4章で特異な設計方法による関連遺構を示し、背景にある当時の学問の状況から設計の特徴、易の文脈での解釈等について述べ、その学術的知識の実践としての藤原宮の南北・東西軸線上の陵墓・神社の解釈についても言及することとする。

2. 幢幡遺構の概要と配置計画の解釈

まず紀要より、本報告と特に関連する遺構の概要と配置計画の解釈を示す。以下、基準尺は1尺0.295mである。

(1) 遺構の概要

幢幡遺構と考えられる遺構は、7基の柱穴跡からなる。これらの遺構は広場の礎敷面と同時期の遺構と考えられている。柱を据え付けるための堀方は大きいもので一辺1.7–1.8m、深さ1m、柱抜き取り穴も一辺1.7m、深さ1.4mを測るものがあり、いずれも大型である。断ち割りによる断面観察では、柱抜き取り穴の底面は柱の当たり状に沈み込む部分が確認できるものもあるが、同じ柱穴で複数回柱を立てたことを積極的に示す痕跡はない。

それらの南の旗竿遺構は東西に並ぶ柱穴16基からなり、東西両端のみ柱穴に1本分の柱抜き取り穴、その他は細長い柱穴に2本分の柱抜き取り穴が確認されている。

(2) 配置計画の解釈

大極殿院南門の規模は桁行7間×梁行2間（17尺等間）、基壇は東西135尺×南北48尺であり、南面と北面の中央に幅85尺、出4.5尺の階段が取り付けられていた。鳥形幢は藤原宮および大極殿院南門の南北中軸線上付近、実際には東に0.3mずれて、南門南階段の南端から70尺に配された。そこから北に30尺、東西にそれぞれ40尺の位置に日像幢・月像幢が配され、これらも東に偏った。四神の幡については南北20尺の距離で列び、東西は118尺を隔て

る。青龍幡と朱雀幡は日像幢から東へ20尺とはならず、烏形幢を基準に東西60尺の位置に施工されたものではないことがわかる。一方、青龍幡と玄武幡の中心、朱雀幡と白虎幡の中心は大極殿院南門の中軸線にほぼ揃う。南門の桁行柱間総長は119尺(17×7)であり、これらは南門の東西両妻柱列の南に並び、南側柱筋から45尺と65尺である(図-1)。なお、16本の旗竿遺構は南面階段南端から100尺とし、その東西の端は大極殿院南面東回廊西端柱および南面西回廊東端柱筋と揃えるように計画されたとする。

以上より幢幡遺構は大極殿院南門の南面階段南端中央と南門の両妻柱列という、二つの基準を用いて計画・施工されたと結論づけている。とは言え、双方ともに藤原宮の中心に位置する大極殿院南門に関することから、南門の重要性を示すという。なお、紀要では実測値とそこから得られる想定計画尺との誤差を2尺位までとしていると思われる。

以上のように紀要では藤原京・藤原宮の中心である大極殿院南門が幢幡遺構の配置に関係していることは示されているが、幢幡遺構の場所によって測る基準が門の階段南端または柱筋であり、南門心からの距離の検討が記されていない。

3. 配置計画の検討

(1) 計測の基準

紀要では南面階段南端から烏形幢・日像幢・月像幢の位置を測る。これは『延喜式』(兵庫寮式元日即位条)に「從殿中階南去十五丈四尺建烏像幢」、『内裏儀式』には「当殿中階南去十六丈建銅烏像幢」とあり、計測の基準として建物の南階段が使われていたことと整合的ではある。しかし、これらの儀式書は行われた儀式の内容を伝えるものであり、儀式における設えの配置や意図を伝えるものではない。今ここで述べようとしているのは後者である。

紀要には幢幡遺構7基の内の6基について1/50の平面実測図や断ち割り図も掲載され、柱の据えられた位置をある程度推定することはできる。そこで紀要の説明や図面を用い、大極殿院南門の中心位置や幢幡遺構等の推定位置を表-1に記した。ここでは南門の中心から幢幡遺構の各柱推定位置との距離等を計測・算出し、配置計画を推定することとした。ただし、ここでは検討する遺構の範囲が比較的小さいため、国土方眼座標に対する藤原宮の遺

構のずれは考慮しないこととする。

(2) 配置計画

表-1に大極殿院南門心から各幢幡柱推定位置までの距離を尺度で算出し、読み取れる想定計画尺を記した。それらの差、すなわち誤差は大きいもので2.20尺であった。また、左右で対称位置にある柱想定位置間でも算出値と想定計画尺の距離の差は2.37尺であった。いずれも紀要と比べても大差なく、許容できよう。

次に表-1から幢幡遺構の配置の計画性を捉えてみよう。

青龍幡・玄武幡は門心から南へ60尺の距離で東西にそれぞれ60尺進んだ位置に、すなわち、門心から南東または南西へ $60\sqrt{2}$ の距離で配置された。

朱雀幡・白虎幡は門心から南へ80尺の距離で、東西にそれぞれ60尺進んだ位置に、すなわち門心から100尺の距離に配置された。

日像幢・月像幢は門心から南へ $40\sqrt{3}$ 尺の距離で、東西へそれぞれ40尺の位置に、すなわち門心から80尺の距離に配置された。

烏形幢は日像幢・月像幢の中心の30尺南へ配置された。

旗竿遺構については門心から37.9m、128.47尺となって想定計画尺は130尺と見なせる。

さらに、南門心から青龍幡・玄武幡の中心、日像幢・月像幢の中心、朱雀幡・白虎幡の中心、烏形幢までの方向角を見ると、日像幢と月像幢の中心と、烏形幢は4秒差で、中心が西に6cm寄せば一直線となるため、これらは一体的な施工がなされた可能性は高い。また、青龍幡・玄武幡の中心と、朱雀幡・白虎幡の中心も比較的小さい値を示す。

4. 考察

(1) 関連遺構の状況

幢幡遺構7基の位置は南門心からの距離で説明が可能であることがわかった。重要な施設の一点からの距離で設計がされている施設の事例を見てみよう。

大極殿院や朝堂院など古代の宮殿の朝庭は、概ね礫敷の平らな広場であるが、唯一、奈良時代前半の平城宮第一次大極殿院は高低差を利用し、大極殿を北寄りの高台に配し、高台に登るための斜路を東西に設けた。その高台の前面部分と入隅・出隅を有する斜路の側面部分は塼という瓦質の煉瓦で化粧されており、この遺

表-1 藤原宮朝堂朝庭の幢幡遺構の配置

遺構 / 関連遺構間距離	遺構番号	計測・算出の別	X	Y	特記事項 / 関係点間距離	南門心からの距離				想定計画尺 距離(尺)*	誤差*	南門心からの方向角
						ΔX (m)	ΔY (m)	距離 (m)	距離 (尺)*			
大極殿院南門心	SB10700	計測	-166,219.80	-17,686.50	奈文研紀要2016廣瀬堂p.78	0	0	0	0	0	0	基点
基壇北辺・西辺		計測	-166,212.60	-17,706.30	南北14.4m							
基壇南辺・東辺		計測	-166,227.00	-17,666.20	東西40.1m							
想定南側柱筋		算出	-166,224.82	-17,686.50	門心から17尺南					17		
南階段南端		算出	-166,228.21	-17,686.50	(南側柱筋から4.5尺南)					21.5		
青龍幡	SX10767	計測	-166,237.90	-17,668.50		18.10	18.00	25.53	86.54	84.85 (60√2)	1.69	135° 09' 31"
青龍幡・玄武幡中心		算出	-166,237.95	-17,685.85		18.15	0.65	18.16	61.56	60	1.56	177° 56' 56"
玄武幡	SX11407	計測	-166,238.00	-17,703.20		18.20	16.70	24.70	83.73	84.85 (60√2)	1.12	222° 32' 20"
青龍-玄武距離		算出	ΔX=0.1 ΔY=34.7	34.70m/0.295=117.63尺						120	2.37	
日像幢	SX10765	計測	-166,240.10	-17,673.25		20.30	13.25	24.24	82.17	80	2.17	146° 52' 02"
日像幢・月像幢中心		算出	-166,240.05	-17,685.38		20.25	1.12	20.28	68.74	69.28 (40√3)	0.54	177° 00' 13"
月像幢	SX11405	計測	-166,240.00	-17,697.50		20.20	11.00	23.00	77.97	80	2.03	208° 34' 15"
日像-月像距離		算出	ΔX=0.3 ΔY=24.25	24.25m/0.295=82.20尺						80	2.20	
日像-日像幢・月像幢中心距離		算出		82.20÷2=41.10尺						40	-	
朱雀幡	SX10766	計測	-166,243.80	-17,668.60		24.00	17.90	29.94	101.49	100	1.49	143° 17' 00"
朱雀幡・白虎幡中心		算出	-166,243.90	-17,685.95		24.10	0.55	24.11	81.73	80	1.73	178° 41' 33"
白虎幡	SX11406	計測	-166,244.00	-17,703.30	平面検出のみ	24.20	16.80	29.46	99.86	100	0.14	214° 46' 08"
朱雀-白虎距離		算出	ΔX=0.2 ΔY=34.7	34.70m/0.295=117.63尺						120	2.37	
銅烏幢	SX10760	計測	-166,248.40	-17,685.00		28.60	1.50	28.64	97.08	99.28 (40√3+30)	2.20	176° 59' 14"
銅烏-日像距離		算出	ΔX=8.1 ΔY=11.75	14.39m/0.295=48.76尺						50	1.24	
銅烏-月像距離		算出	ΔX=8.4 ΔY=12.5	15.03m/0.295=51.05尺						50	1.05	
銅烏-日像・月像中心距離		算出	ΔX=8.25 ΔY=0.55	8.36m/0.295=28.31尺						30	1.69	176° 59' 52"
旗竿遺構	SX11401	計測	-166,257.70	-17,686.25		37.90	0.25	37.90	128.47	130	1.53	

* 基準尺は0.295m

構を博積擁壁と呼んでいる。約70度すなわち8尺上がりの3尺転びの勾配を持ち、前面部の高さは8尺に復元できる。この博積擁壁の設計方法は太極殿院南門心から中軸線上700大尺(840尺)北に、太極殿の中央やや北寄りに設置される玉座である高御座を合わせ、ここを中心とした同心3円(半径は40尺×6, 7, 8)と太極殿の中心から120尺北の点を中心とした円(半径は40尺×9)の交点などを用いていることが明らかにされている。始皇帝以来、宮殿や墓室等は宇宙を象るものであったが、同心3円と中心の異なる円が交差する状況はキトラ古墳石室天文図に描かれた内規・赤道・外規と黄道を思わせるもので、設計方法は宇宙の構造を意識したものである。さらに、博積擁壁の平面形と勾配に用いた数値から博積擁壁は三足鳥の八咫鳥を象ったとする²⁾。

短期間の存続であった藤原宮の太極殿は平城宮第一次太極殿を経て、恭仁宮太極殿(後の山城国分寺金堂)となり、藤原宮の太極殿院南門は平城京の正門である羅城門に移築されたと考えられており³⁾、建物が引き継がれる。このため宮殿中心部の儀式空間の設計思想にも共通する部分があるものと思われる。

(2) 設計思想の背景にある学問

幢幡遺構の配置の意図は「文物の儀、是に備れり」と記された通り、学術的知識の修得とその実践を象徴的に示すものと思われる。では学術的知識とその実践とは何かを以下に見ていく。

学術的知識で特に重要なのが国家統治の思想的背景となっている儒教であり、その經典を学ぶ経学であった。経学は儒教の聖典である経書(易・書・詩・礼・楽・春秋等)から聖人の教えを解説しようとする学問である。『漢書』では経学の筆頭は『易』であった。『易』は占いの書であると同時に哲学書でもあり、現象のパターンと数とが宇宙の構成要素と考えた。

経学同様に重要だったのが術数で、これは経学を支える学問分野でもあった。術数は広義の数の学問のことで、今日的な意味での天文学・数学・地理学などを主要な分野とし、天文占・五行占・観相学などの疑科学の諸分野をも含んだ。術数の数ないし数の概念には科学的な側面と神秘的な命数・ト数の側面があり一体化していた⁴⁾。また、術数は天人相関思想を背景に、天の意として現れる現象を解説することのできる知識体系と未来を予知する技術、

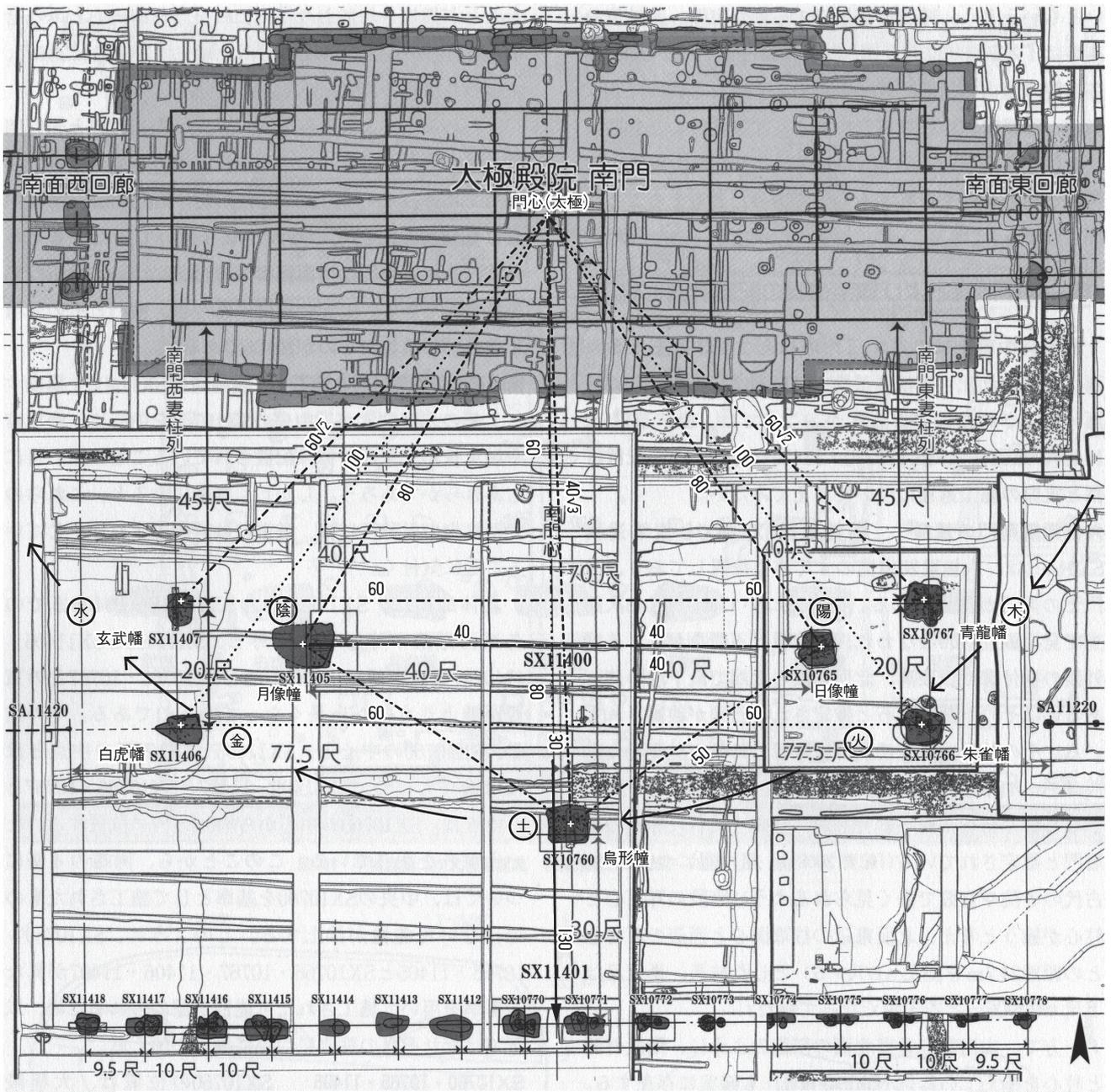


図-1 幢幡遺構・旗竿遺構・太極殿院南門の位置関係 1:300 (文献(1)図106に加筆)

それらを用いた治世術ともいう⁵⁾。

古代の数学書『周髀算経』は『九章算術』とともに中国最古の数学書とされている。『周髀算経』はその序に「古蓋天之学也。以_レ勾股之法_レ度_レ天地之高厚_レ、推_レ日月之運行_レ而得_レ其度数_レ」⁶⁾とあるように蓋天説を説明するために編纂された天文学、暦学のテキストと考えられている。まず、3:4:5の三角形での鉤股弦の法(ピタゴラスの定理)などが示され、宇宙観測の基礎とする。『周髀算経』に関して我が国では、『続日本紀』の天平三年(731)三月七日条に算術を修めて登用されながら『周髀算経』を理解していない官人は式部省に身分を留めておくことだけが許されるとし、出世はできなくなった。また、天平宝字元年(757)十一月九日条に官人の学ぶべき典籍として「曆算生は漢晋律曆志、大衍曆議、九章、六章、周髀、定天論。」とあり、陰陽寮の曆算生のテキストであったことが知られる。

術数には陰陽五行思想も含まれる。陰陽五行思想は陰陽説と五行説が結合した思想である。陰陽説は宇宙の現象事物を陰と陽の働きによって説明し、五行説は万物の根源を木火土金水の五元素におき、それらの関係や消長によって宇宙は変化するとみる。陰陽五行思想では、混沌から陽と陰が分離して天地が形成され、陰陽が交感して万物を生成したとする。天上では日月と、木火土金水の五惑星、地上では陰陽の二気とそれらが生み出した木火土金水の五気が万物を生成したとみる。この思想を象徴的に示すのが我が国初の通貨である富本銭に用いられた七曜文である。これは天地の間で五行が順序正しく循環する様子を示すものである⁷⁾。「木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず」という関係を五行相生といい、「水は火に勝(剋)ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つ」という関係を五行相剋という。

陰陽五行思想の内容を簡潔に伝えるのが『五行大義』で、隋の蕭吉によって撰述された五行に関する古今の説の集大成したものである。『五行大義』は『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志等に見えるが、中国では散佚した。我が国では前述の天平宝字元年(757)の勅の中で陰陽生の必読書の一つとされている。

その他関係する学問には文学もあり、奈良時代には官人らの必読書となっていた『文選』賦篇などの漢籍も含まれる。

(3) 幢幡遺構の配置に用いた特殊な三角形

大陸風の建築様式を持つ大極殿が初めて建設されたのが藤原宮である。この名称の「大極」は唐の長安城太極宮の太極殿の影響である。その太極とは『易』の思想では宇宙の根源で、天文占星思想では易の太極を天帝の居所の北極星付近に重ねた。

宮都の中心、大極殿院南門心を太極に見なせば、陰陽たる日像幢・月像幢は太極から80尺(なお、表-1の数値の上からは陽の最大数9を重ねた81尺の正三角形の可能性もある。理由は後述)、双方の距離も80尺であり、正三角形になる。太極が陰陽から成り、双方の調和を象徴するような形である。この三角形で中軸線を境にした直角三角形としてみると、中軸線上40 $\sqrt{3}$ 尺の距離から東西に40尺の位置で配置したことになる。このとき用いた三角形は正三角形を二分した1:2: $\sqrt{3}$ の直角三角形である。

次に四象たる青龍幡・玄武幡の双方の距離は120尺、これらは太極から中軸線上60尺の位置で東西に60尺の距離に配置し、斜辺60 $\sqrt{2}$ 尺、1:1: $\sqrt{2}$ の直角二等辺三角形になる。朱雀幡・白虎幡も双方の距離は120尺、中軸線上80尺の位置で東西に60尺の距離、すなわち太極から100尺に配置する。中軸線を境にした直角三角形としてみると、3:4:5の直角三角形である。

さらに鳥形幢は日像幢・月像幢の midpoint から30尺南に配置し、このときできる直角三角形は3:4:5である。

埴積擁壁の設計には円すなわち規(コンパス)が使われていたが、幢幡7基の配置計画に上述のような特殊な直角三角形すなわ

ち矩(かぎ型定規)が用いられていたのは何故であろうか。

前述の通り、3:4:5の長さの比を持つ直角三角形については『周髀算経』で言及されていた。『日本書紀』天武天皇4年(676)正月朔条には陰陽寮が見え、五日条には占星台を初めて建てたことが知られる。大宝元年の25年も前から天意を知るべく陰陽師らの活動が始まっていたのである。これら特殊な直角三角形は天文をはじめとする術数知識習得の象徴と見ることができよう。

(4) 数値の重視

大極殿院南門心から各幢幡遺構まで、また青龍幡一玄武幡の東西距離なども含めて、全体としてこれらの遺構の配置に用いられた想定計画尺をみると、30・40・50・60・80・100・120尺となる。その中の40・80・120は40尺の1・2・3倍となり、平城宮第一次大極殿院内の埴積擁壁の設計で用いられたのと同じ規則性も窺える。日本古代において数字は単なる数値ではなく、聖なる数字が意識して使われていることが指摘されている⁸⁾。基本単位となる40尺の四十については重要視された実例を記しておこう。

1) 『五行大義』

『五行大義』の序に次のようにある⁹⁾。「凡そ二十四段、別して之を分ち、合して四十段。二十四なるは、節数の気なり。総じて四十なるは、五行の成数なり。(本書は、凡そ二十四段であり、更にこれを分けて、四十段とする。二十四とは、二十四節気の数である。全てで四十というのは、五行の成数である。)」

書籍の章や節の数を時空やそれを説く術数の数に因むのである。一から十までの整数の内、一から五までを生数、六から十までを成数といい、生数の和は十五、成数の和は四十、その和五十五は天地の数とする¹⁰⁾。十五と四十の組み合わせは藤原宮大極殿院出土の軒丸瓦の文様に蓮子と珠点の数として現れるものもある。

2) 奈良時代

前述の通り、平城宮第一次大極殿院でも40尺の倍数を基本とした。その設計思想において意識したと思われる、唐洛陽城洛陽宮の正殿である明堂の規定では四十は九會之数と呼ばれていた。

その平城宮第一次大極殿院の南にある中央区朝堂院で2005年、大嘗宮の遺構が一期分検出された。東区朝堂院では5時期分の遺構が既に検出されており、平城宮外の南薬園新宮で即位した孝謙を除き奈良時代に即位した天皇の大嘗宮の遺構がそろったことになる。各時期の大嘗宮正殿の位置関係は中央区の場合も含め40尺ずつ南へ移動していると指摘されている¹¹⁾。前回の大嘗祭の時の正殿の位置を記録に留めておき、いつかは知れぬ次の大嘗祭の時にはその遺構を踏むことなく、南への移動を繰り返すのである。先代の子孫と当代の子孫とは親子あるいは君臣のような関係で、礼により南へ下ると解せるのである。四十が古代の朝廷においていかに重視されたかがわかる。

『続日本紀』天平宝字元年(757)八月甲午(十八日)条をみると、蚕が「五月八日開下帝積標知天皇命百年生息」と文字を綴ったものが献上され、これによって天平宝字に改元されることとなる。孝謙天皇はその文字の意味を群臣に議論させ、臣下はその意味を奏上、天皇は「五月八日の五と八の数字を並べて掛けるならば、天子の聖寿の不惑(四十歳)に通じ、日と月はともに明るく、皇室の末永い繁栄を象徴する」¹²⁾と加えた。こうした付会とも言える数値とその積についての天皇の見解は単なる個人的な思いつきではなく、編者を含む知識層の認識ひいては国家統治のイデオロギーに共通するものとみるのが自然であろう。

『漢書』律曆志に「五声と八音は調和して音楽が成立する」¹³⁾としているように、その積四十は前述した成数の和であり、五行の五と天皇が支配する国土(大八洲)の象徴としての八を掛け合わせたもので、最小公倍数はともに調和する数字として重視されたものと思われる。

これらと同様に朝廷での儀式的設えの配置に使われる40尺単

位も含意のあるものと考えらるべきであり、その倍数が規則的に使われることは、五惑星などの天文が織りなす規則正しい宇宙の秩序（実際には火星の逆行現象等もあるが）、五行の循環を地上に再現し、国土の八方（八隅）に広めることになるのである。

(5)『易』・『五行大義』から見た遺構の配置

『易』繫辭上傳には「易に太極あり、これ両儀を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。」とある。八卦の元は老陽・少陽・少陰・老陰の四象であり、四象の元は陰陽の両儀であり、その陰陽を統べるものが太極であった。四神幡の位置特定には、4穴の中央を東西、南北に分割する十字線を考えれば、東と西、南と北はそれぞれ陽と陰に当たるため配置は自ずから明らかである。また、中央に鳥形幢（黄金の銅鳥で土にあたる）も加えて考えれば、東から南、西へと日の動く方向に合わせ木火土金水の五行相生の順で配置されており、天道に適うことになる（則天主義）。

太極が陰陽を生ずというのは太極が陰陽を生み出すのではなく、太極は構成要素の陰陽からなるという意味である¹⁴⁾。このため構成要素である陰陽・四象にあたる日月・四神の配置の基準は太極に見立てた南門心にあり、太極への属性を示すのである。

次の『五行大義』巻第一¹⁵⁾では生じるものの順に注目したい。

「馬融は易の太極を以て、北辰と謂ふなり。両義を生じ、両義は日月を生じ、日月は四時を生じ、四時は五行を生じ、五行は十二月を生じ、十二月は二十四気を生ず。北辰の位に居りて動かず、其餘は四十九、轉運して用ふるなり。（馬融は、易の太極を北辰（北極星）と言ひ、太極（一）は両義（二）を生じ、両義（二）は日月（二）を生じ、日月は四時（四）を生じ、四時は五行（五）を生じ、五行は十二月（十二）を生じ、十二月は二十四気（二十四）を生じ（これらの数の合計は五十であるが）、北辰は定位にあつて動かないので、その余りの四十九を運用するのである、としている。）」

四時は五行を生ずるとあり、その五行の土の性格をもつ鳥形幢は四象の朱雀・白虎の位置を決める三角形と相似の関係性を保ちつつ、日像幢・月像幢との位置関係から決められている。これは鳳凰には陰陽の調和を促す役割があつたように、中央の鳥形幢は陰陽を統べ、四象も司ることを意識したのである。

五行の次に生じるとしたのが十二箇月であるが、十二と同様に1年の間の月を象徴するのが十三である。『景定建康志』巻21城闕志太極殿条によれば、「太極殿は、建康宮城内の正殿である。晋にあつては12間で建造し、1年12箇月を象徴した。梁の武帝になつて13間に改造し、閏月をも象徴した。」¹⁶⁾という。中国南朝梁の天監12年（513）のことである。半端に感じる数であるが、太極殿など重要な建物が時空を象るのに用いた数値である。

『易』繫辭上傳では四象のあとに生じるのが八卦である。ところで、平安時代の即位儀や朝賀の内容については史料が豊富で、ここに現れる熊象幡を旗竿遺構に充てて来朝しない熊襲の象徴とも考えられるが、皇統の異なるこの時代にまで遡及させることに抵抗感が全くない訳ではない。そこで敢えてここでの文脈の延長で述べれば、太極から十三丈（130尺）の位置に東西に並べられる16本の旗竿遺構は八卦旗二組で、東西の組み合わせで六十四卦、すなわち宇宙の万象を表現することにならないだろうか。大陸風の本格的な太極殿が生まれた時期のため、易の思想が直截的に反映されたと見るのである。ただし、現段階では卦を旗に用いるのは管見の限り太極旗以外実例を採っていない。

(6)学術的知識の実践としての藤原京の四方

整然とした左右対称な宮殿内の建物配置や条坊制街路の敷設には直角を作り出す測量技術が必要である。直角定規（矩）がなくとも、3：4：5の長さの比を持つ三辺で直角三角形ができ、正三角形の一辺の中点と対角を結べば1：2： $\sqrt{3}$ の直角三角形ができる。また、円弧を用いて一辺とそれに垂線を降ろす方法を使えば1：1： $\sqrt{2}$ の長さの比を持つ直角三角形を作ることができ

る。そんな測量技術の修得と実践を誇示するかのよう、幢幡の配置にその三角形が用いられ、さらに藤原京の四方には陵墓や国産み神話に関わる神社が立地することが注目される。

藤原京の南北中軸線は国土方眼座標に対して北に西に0°44'10"振れている。藤原京の南に立地する天武持統陵はその振れを考慮しても都の中軸線上で、藤原宮大極殿院南門から3.7kmに立地しており、計画的であつたことが知られる。一方、文武天皇（699）三年十月に造営されたと考えられる天智天皇陵（山科山陵）は経度がほぼ一致し南門の約55km真北に位置するが、振れを考慮すると東へ670mずれており、経度の一致は偶然とする見解がある¹⁷⁾。

神武天皇陵は壬申の乱の時には存在したことが知られており、現在畷傍山の北東に宮内庁治定の神武天皇陵があるが、さらにその北東には明治11年に第2代綏靖天皇として陵治定された四条塚山古墳がある。こちらは元禄期には神武天皇陵に治定されたこともあり、こちらこそ律令期の神武天皇陵との見解がある¹⁸⁾。大極殿院南門の西には藤原宮西面中門があり、そこから大路が延びるため道路を避けた南側、門心から1.6kmに立地している。

門心から東へ12.7km、北へ170mには奈良県宇陀市榛原区高塚には延喜式内社八咫鳥神社が所在する。『続日本紀』慶雲二年（705）九月九日条により、大和国宇太郡に八咫鳥を祀る社が置かれたことが知られる。なお、この日は天武天皇の二十回忌、すなわち没後ちょうど十九年（一章という。19太陽年間に7閏月を入れる太陰太陽暦の基準）にあたる。藤原宮の時代に位置、時期ともかなり計画的造営であつたことが指摘できよう。

以下は遠方にあり、精度がよい訳ではなく計画的とも言えないが、およそ東、南、西にある神社について指摘しておく。

南門から東へ約82km、南へ1.5kmには伊勢神宮外宮が位置する。文武天皇二年（698）12月29日、多気大神宮を度会郡に遷したことが知られ、伊勢神宮の内宮か外宮とみられる。中国の戦国時代以降に成立した『周礼』考工記を参考にして藤原京は造営されたと考えられている¹⁹⁾が、これには「左祖右社」という原則が記されている。南面して左に宗廟、右に土地の神と穀物の神を祀る社稷を置くというものである。この制度をそのまま古代日本が導入している訳ではないが、律令では既存の伊勢神宮を宗廟に相当するものとして読み替えているのである²⁰⁾。

南門から南へ約74km、西へ3.7kmには延喜式内社熊野本宮大社（計測は大斎原）が位置する。大社の主祭神は家都美御子大神で、神武天皇の東征神話の中で天皇を大和に導いた八咫鳥を神使とする。鳥形幢が他の幢幡遺構よりも南へ配置されるのは天子南面で政治を行う天皇を導く意味からで、鳥の顔も南を向くのであろう。

南門から西へ約88km、南へ4.5kmには淡路国一宮で延喜式内社伊弉諾神宮が位置する。国産み神話に登場する伊弉諾尊と伊弉冉尊が祭神である、本来は伊弉諾尊のみであるという。

(7)漢籍にみる天下の中心

秦の宰相である呂不韋が編纂した『呂氏春秋』の「慎勢」には、「古の王者は、天下の中を択んで国を立て、国の中を択んで宮を立て、宮の中を択んで廟を立つ。」とある。おそらく意識としては国の中心を選んで藤原京を造営し、その中央に藤原宮を営んで、さらにその中心には大極殿院南門をおいた。

斯波義信²¹⁾によると、「古来、都の造営は中心地点となる吉祥の地をまず定め、鉛錘を垂らして、その影が一定の時間のあいだに陽光につれて移るようすを地上にマークして、慎重に南北の軸線を引くことが重要な儀式だった。」という。『文選』左太冲「魏都賦」にみる都の宮殿の造営でも、易に従い、コンパスを用い、方位を定めるために星を観測し測量をしていることが注目される。

こうした文献から都城建設のあり方を学び、都城そのものではないが藤原宮の真東に八咫鳥神社を設け、真北と真南に天智天皇陵、天武持統陵を設けたと理解できる。伊勢神宮、伊弉諾神宮、

熊野本宮の立地がどこまで意識したかは不明であるが、およそ東南、西にあることは好都合であった。

『日本書紀』の神武天皇の宮殿造営でも橿原の地は国の真ん中であるとされたが、藤原の宮都を構想した天武天皇も天下の中心であることを意識して造営し、藤原宮都の東西・南北中軸線上に方位正しく配置された陵墓や神社は宮都の中心性を際立たせる役割を担ったのであろう。そして、これらに関係する天皇の事績や、始祖等に関わる神々の神話は天文占星術を得意とした天武天皇以降の皇統の正統化に用いられたのであろう。

では何故、天下の中心を求めたのか。『文選』張平子作「東京賦」で後漢の光武帝と明帝の国造りに関しては、次のように記される²²⁾。「區宇又り寧く、和を思ひ中を求む。睿哲玄覽して、茲の洛宮に都る（四海の内は、よく治まり安らかになり、願うは、陰陽のほどよく調和する土地、求めるは、天地の最中に当たる土地。聖哲の天子光武帝は、天下のすべての地を洞察なされて、選んだこの洛陽の宮殿に在される。）」天下の中心は陰陽が調和しやすい土地だからである。

ところで、『統日本紀』によると、大宝元年正月元日から9年後の和銅3年（710）正月元日には朝賀が行われ、16日には天下の中心である大極殿院南門「重閣門」に天皇が出御、文武百官と隼人・蝦夷とに賜宴し、諸方の楽を演奏させた。『礼記』²³⁾によれば礼は陰から、楽は陽から生まれ、礼楽が相伴うのは陰陽が和合して万物が安泰を得るからという。重閣門の北（陰）の大極殿院では君臣の別を明かにする服属儀礼（陰）、南（陽）の朝堂院では音楽を伴い君臣相和す賜宴（陽）が行われた。陰陽の調和と五行の規則正しい循環を願う思いは天下の中心で儀式を行うことにより、天帝のいる天空の中心へ「宇宙軸」²⁴⁾を伝って届くと観念されていたのである。

大極殿院南門の前に設置された7本の幢幡遺構は、天意の観測に適した直角三角形を含み、その辺の長さは重要で好ましい意味を持つ数字の倍数等を用いて配置された。天の北極（太極）を巡る北斗のように規則正しい宇宙の秩序を天下にも遍く広げるために、平面的には天帝のいる天の北極に見立てた南門心と7本の幢幡は相互に規則性と術数的関係性を付されて位置づけられた。そこは天上界の天帝から天下（地上）の支配を委託された天子に擬える天皇が出御する門の前であるからである。

藤原宮大極殿院南門の発掘調査で、南門に接続する南面西回廊の基壇から地鎮遺構が検出され、埋められた平瓶の中から9つの水晶と開口部を塞ぐような九枚の冨本銭が発見された²⁵⁾。これは九を重ねること（重九）によって、天地や宮室の長久（音通する）を願ったものと思われる。同時に9つの水晶は長めの水晶3本で上卦が乾、短めの水晶6本で下卦が坤を、双方で六十四卦の一つ、地天泰を表したものと思われる。

『魏都賦』²⁶⁾には魏都（曹操の鄴城）の都市建設が「重文を思ひて大壯に摹り荀卿を覽、蕭相を采る。（易の大壯の卦に則り、荀子の書や蕭何の故事を考慮にいれた。）」のように記される。大壯は上卦が震、下卦が乾である。旗竿遺構の東西両端1基は柱の構造が異なっていたが、これは八卦から一つの卦が選ばれたように、八卦旗の東西各8本の中から1本が選ばれたことを示すために構造を変えたものではないか。想像を逞しくするなら、魏都賦に擬えたと見て、一方は乾旗、他方は震旗になろう。

5. おわりに

藤原宮大極殿院南門のような極めて重要な建物の前に配置された七本の幢幡遺構の配置については、その建物の重要なポイントからの距離で設計されている実態が明らかになった。このことは平城宮第一次大極殿前の埴積擁壁の起点・屈曲点の設計手法と共通するものであり、特殊な場所での特殊な設計方法の事例が二つ

に増えたという意義がある。距離計測の中心となったのは、前者は天皇の玉座である高御座、後者は藤原京・藤原宮の中心であり、ともに天皇を中心とした律令国家の在り方を象徴すると言える。

大宝元年正月元日の儀礼は古代史上の歴史的一場面であり、宮都の中心で行った。この四年後に八咫鳥が顕彰され、八咫鳥神社が創建された時には計測して藤原宮の真東に立地したのである。なお、重要建物前の鳥に関しては前漢の靈台（天文観測施設）前や、南朝梁の太極殿前には銅製の相風鳥（風見鳥）が置かれていたことが知られる。渡辺信一郎²⁷⁾は「皇帝は、世界の八方の極地にある八極の門から発する八風を統御し、世界に調和をもたらす存在である。天空・宇宙の中心を模した太極殿前に相風鳥が設置されるのは、必然のことである」としている。鳥形幢はこのような事例も参考に神武天皇の東征神話と整合させながら、陰陽五行思想を纏い創り出されたのであろう。

ところが重要な施設の割には鳥形幢・日像幢・月像幢の施工位置は精度が悪かった。『延喜式』によると七本の幢幡は兵庫寮が設置するものとされ、宮都や儀式の理念を計画する組織とは別だったからであろうか。仮に上述のような理念があったとしても、実際の施工は紀要の示すような方法だった可能性も考えられる。理念と施工実態の乖離等の解明にはさらなる検討が必要である。

参考文献

- 1) 大澤正吾・西山和宏・山本崇ほか（2017）：藤原宮朝堂院の調査—第189次、奈良文化財研究所紀要2017：奈良文化財研究所、84-102
- 2) 内田和伸（2011）：平城宮大極殿院の設計思想：吉川弘文館
- 3) 小沢毅（2012）：平城宮と藤原宮の「重閣門」、文化財論叢IV奈良文化財研究所60周年記念論文集：奈良文化財研究所、681-704
- 4) 川原秀城（1996）：中国の科学思想：創文社、56
- 5) 馬場理恵子（2004）：「術数」概念の成立と漢代学術、京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編第三号、京都女子大学、1-33
- 6) 『統日本紀二』（2000）：新日本古典文学大系：岩波書店、547
- 7) 松村恵司（2005）：古代銭貨の銭文、文字と古代日本4 神仏と文字：吉川弘文館、78-103
- 8) 江口洸（2007）：古代天皇の聖数ライン：河出書房新社
- 9) 中村璋八：五行大義上 新編漢文選7：明治書院、50-51
- 10) 前掲9) 84
- 11) 岩永省三（2006）：大嘗宮移動論—幻想の氏族合議制—、九州大学総合研究博物館研究報告 第四号：九州大学総合研究博物館、99-132
- 12) 宇治谷孟（2003）：統日本紀（中）全口語訳：講談社、170
- 13) 班固 小竹武夫訳（1998）：漢書2：筑摩書房、189
- 14) 高田真治・後藤基巳（2004）：易経（上）：岩波書店、41
- 15) 中村璋八（1998）：五行大義上（新編漢文選7）：明治書院、84-87
- 馬融（76-166）は後漢の経学者で、『論語』『孝経』『易』などに注を残す。
- 16) 渡辺信一郎（2009）：六朝隋唐期の太極殿とその構造、都城制研究（2）奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.1.23、73-89
- 17) 小沢毅・入倉徳裕（2009）：藤原京中軸線と古墳の占地、明日香風第111号：飛鳥保存財団、29-34
- 18) 今尾文昭（1996）：天皇陵古墳解説、天皇陵古墳：大巧社、337-340
- 19) 小澤毅（2003）：日本古代宮都構造の研究：青木書店、220-221
- 20) 小島毅（2004）：東アジアの儒教と礼：山川出版社、49
- 21) 斯波義信（2003）：中国都市史：東京大学出版会、68
- 22) 中島千秋（2000）：文選（賦篇）上 新釈漢文体系：明治書院、145-148
- 23) 竹内照夫（2003）：礼記（中）：明治書院、388-389
- 24) 妹尾達彦（2001）：長安の都市計画：講談社138-140
- 25) 松村恵司（2008）：大極殿院南門の調査—第一四八次、奈良文化財研究所紀要2008：奈良文化財研究所、67-69
- 26) 高橋忠彦（2004）：文選（賦篇）中 新釈漢文体系：明治書院、9-10
- 27) 前掲書16)